

# 学校運動部活動におけるボトムアップ理論の活用

About the inflection of the bottom up theory in the school athletic club activity

阿 羅 功 也 (人間科学部スポーツ学科助手)

Koya ARA (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Assistant)

## 〈要旨〉

学校教育において、運動部活動の中に部員主体で行う要素を持たせることは極めて重要である。そこで本研究では、近年サッカー界において脚光を浴びていて部員主体の部活動運営の事例ともいえる「ボトムアップ理論」を採用している三校のサッカー部を対象にヒアリングを行いボトムアップの実態を明らかとすることを目的とした。ヒアリング結果から、ボトムアップの共通点が確認された一方、独自の展開も見られた。ボトムアップを採用するには、指導者の「学び続ける姿勢」が求められ、この姿をロールモデルとし、部員も成長していけると考えられた。このことから部員主体の部活動運営を目指していくうえで、ボトムアップは有効な手法の一つといえる。

## 〈キーワード〉

運動部活動, ボトムアップ, 主体性, サッカー

## 1 緒言

### 1-1 研究の背景

運動部活動の在り方について内海(1998)は、「生徒の意見を反映させることが基本的に重要」であり「可能な限り生徒に運営を任せていくことも『生きる力』の育成に大いに貢献」すると指摘している。これは部活動の本来の姿である生徒の自治活動としての推奨である」(p.202)とも述べている。この「生きる力」について文部科学省(2014)では、「それは、知・徳・体のバランスのとれた力のこと」とし、「変化の激しいこれからの社会を生きるために、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力の知・徳・体をバランスよく育てることが大切」であるとしている。こうしたバランスのとれた「生きる力の育成」は、内海が述べたように、運動部活動は部員主体で行うことが効果的なものではなかろうか。しかしながら内海(1998)は、「自治活動としての部活動＝民主的部活動とは何か、これが戦後日本の部活動運営における最大の課題であるが、その具体的なイメージが欠乏しており、知らず知らずのうちに、管理的、抑圧的な運営に陥っている例も多い。」(p.202)と述べている。つまり、部員主体の部活動が求められてはいるのだが、具体策や取り組みが周知されていないため、その結果、指導者が主導の部活動運営が主流となってきている。

近年、サッカー界において新しい考え方が注目され始めている。それが「ボトムアップ理論」である。これは、平

成18年度全国高校総体(06総体THE近畿)に初出場初優勝を成し遂げた広島観音高校サッカー部の当時監督を務めた畑喜美夫氏によって提唱されたものである。ボトムアップ理論について、畑(2014, p22)は「ボトムアップ式指導では、選手が主役です。選手主導でチームを構築していきます。」と述べている。

(ボトムアップと対極の考え方として、「トップダウン理論」が存在する。これについて畑氏(2014, p23は、「監督が選手たちに指示・命令で動かしてチームを組織する方法です。」と述べている。つまり、指導者が主導となって部活動運営をしていくことであると言える。)

### 1-2 運動部活動の意義

運動部活動の意義について、杉山(1998)は「昨今、学校においては、教師と子供の信頼関係の希薄化、ルールや約束などの軽視、協力や思いやりの心の欠如などの問題が指摘されている。このような状況の中で、子供の自発的・自主的・自治的活動である運動部活動を積極的に推進していくことは、子供の個性の伸長を図るとともに、運動部活動を通して、教員と子供の人間関係、学級や学年を超えた子供相互の信頼関係、子供自身の克己心、他人との協調性などを育てる上で大きく役立つものといえる。豊かで充実した学校生活の実現のため、子供一人一人の能力・適性、興味・関心等に応じた適切な指導が行われる必要があります、

今後、運動部活動をさらに意義ある活動として推進していくことが緊要である。」としている。

また、文部科学省の「中学校学習指導要領第一章総則4の2」においては、「生徒の自主的、自発的な参加により行なわれる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図れるように留意すること」とされている。

これらのことから、運動部活動とは部員が自発的・自主的に目標に向かって取り組んでいくものであり、かけがえない場であるといえる。

### 1-3 運動部活動の現状

石原（2012）は運動部活動の現状について、「一部の部活動に見られる勝利至上主義の問題が挙げられる。これは運動部において特に問題となっている。勝利至上主義の問題点は、行き過ぎた指導や長時間の練習が生徒の心身の健全な発達にとって弊害であることや、体罰やいじめなどが発生する可能性が高いことである。」とされている。さらに加部（2013, p227）は、「長く日本のスポーツ界、特に高校の部活動は、恐怖政治に支配される傾向が強かった。上意下達徹底され、監督の言うことが絶対で、選手は大声で怒鳴られながら、乱射される叱責、罵倒、罰則から逃れるように力を振り絞った。」と行き過ぎた顧問（指導者）主体の部活動運営について述べている。また、専門知識に優れた顧問（指導者）の指導を受けられないまたは顧問（指導者）が不足していることも運動部活動の現状である。これについて文部科学省は、文部科学白書（2006）の中で、「近年、児童生徒数の減少などによる学校の運動部活動参加児童生徒数の減少、指導者の高齢化や実技指導力不足などの要因で、単独校によるチーム編成ができない、あるいは、十分な指導ができないなど、競技種目によっては、その活動を継続することが困難な状況が生じている。」としている。また、日本体育協会（2014）は「学校運動部活動指導者の実態に関する調査報告書」の中で「『担当教科が保健体育ではない』かつ『現在担当している部活動の競技経験なし』の教員のうち、約4割が『専門的指導力の不足』という課題を有している状況となっており、今後、この解決に向けた方策を検討する必要がある。」と述べている。

以上のことから、運動部活動の現状として、行き過ぎた顧問（指導者）主体の部活動運営と、専門的知識の少ない顧問により、やむを得ず部員が部活動運営をする部活動運営といった二パターンが挙げられる。どちらもとも部員を満足させられているとは言い難い。

### 1-4 研究の目的

ここまで見てきたように、部員が主体となって部活動運営を行うことの必要性が指摘されている。その具体的な方法や取り組みを明らかにする研究が求められている。そこで本研究では、近年、サッカー界において脚光を浴び、部員主体の運動部活動の具体例ともいえる「ボトムアップ理論」を採用し成果を出している三つの高校のボトムアップの実態を把握し、その三校の共通点や独自性を分析することで運動部活動運営におけるボトムアップの実用性について検討することを目的とする。

## 2 方法

### 2-1 調査対象

本研究では、ボトムアップ理論を採用し、かつ高い競技成績を残している「堀越学園高校（東京都）」、「綾羽高校（滋賀県）」、「松商学園高校（長野）」のサッカー部を対象とした。

### 2-2 調査方法

調査方法は、各サッカー部の外部監督もしくは顧問にヒアリング調査を行った。ヒアリング調査の項目は、畑喜美夫氏の文献を参考に作成した。また、各サッカー部の共通点や独自の展開を検討するための項目として、ボトムアップの実践内容についてヒアリングを行った。各部活動顧問に実施したヒアリングはICレコーダーを使用し記録した。

ヒアリングの実施概要は以下の通りである。

#### <堀越高校サッカー部>

顧問：藏田茂樹氏

監督：佐藤実氏

日時：2015, 11月24日10時～12時

場所：東京都「穎明館中学・高等学校」

成績：2015, 2016年度東京都大会決勝進出。

#### <綾羽高校サッカー部>

顧問・監督：岸本幸二氏

日時：2015年11月29日13時～14時30分

場所：滋賀県「綾羽高等学校下戸山グラウンド・スタッドフルーム」

成績：2015年滋賀県大会優勝（全国出場）

#### <松商学園高等学校>

顧問・監督：高山剛治氏

日時：2016年11月30日15時30分～16時45分

場所：長野県「松商学園高等学校・第一応接室」

## 2-2 ヒアリング調査項目

ヒアリング項目は以下の7つである。

1. ボトムアップ導入のきっかけ、経緯について。
2. ボトムアップの具体的な取り組み。
3. 指導者としての関わり方。
4. ボトムアップ導入前と後の変化。
5. 動部活動の現状について。
6. ボトムアップは誰にでもできるか。
7. まとめ<本校におけるボトムアップとは>

これらの項目についてヒアリングしていく中で、重要で  
ある部分を抜き出し、独自性や共通点を明らかとした。

## 3 結果及び考察

### 3-1 堀越高校のボトムアップ

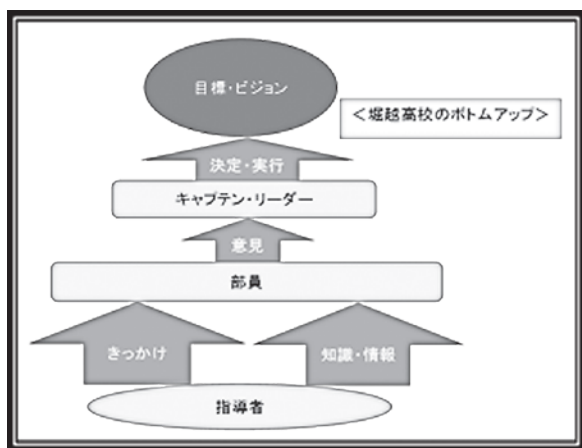


図1：<堀越高校のボトムアップ>

堀越高校は基本的には選手が中心にチーム作りを行って  
いく。しかし、その土台となる情報や知識、きっかけとな  
る問いかけは指導者の役割であって、すべての権限は選手  
にあるのだが、新しい知識や技術はどんどん指導者から発  
信されるシステムになっている。また、部員で意見を出し  
ていきながら、最終的な決定はキャプテンやリーダーが担  
う。これによって、現段階で一番成長するのはリーダーで  
あるが、次のステップとして周りの部員たち（フォロウ  
ー）がもっと成長していくボトムアップの在り方が工夫さ  
れつつある。

### 3-2 綾羽高校のボトムアップ

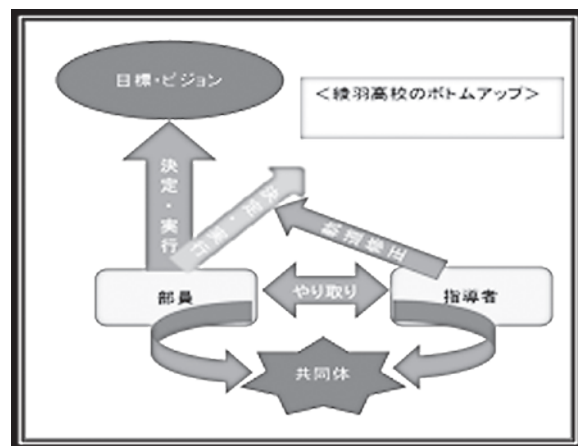


図2：<綾羽高校のボトムアップ>

綾羽の特徴の一つとして、まず部員と顧問がフラット  
（横並び）の状態であることが挙げられる。部員と指導者  
の間での情報交換が多く行われていて、一つの共同体とし  
て動いている。そのため、選手と指導者の間の意思疎通が  
多いことが特徴である。このため、お互いに気持ちよく部  
活動に打ち込んでいると思われる。ただし、指導者は部員  
が本来の在り方から外れていると判断した場合、その軌道  
修正を行うといった役割を担っている。その判断をはっき  
りと示し、信頼されるためにも、部員との意思疎通は欠か  
せないのであろう考えられた。

### 3-3 松商学園高校のボトムアップ

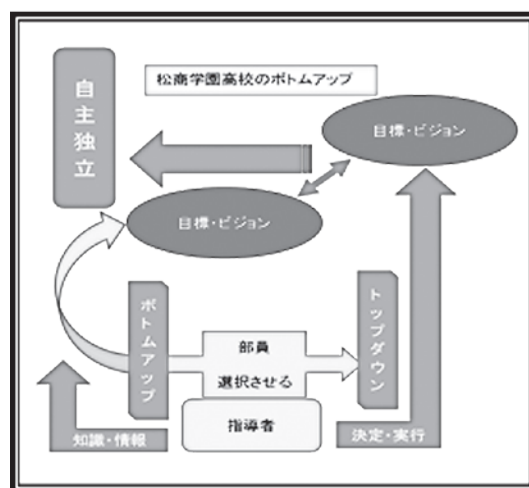


図3：<松商学園高校のボトムアップ>

松商学園高校の特徴は、最初に、部員に「トップダウ  
ン」か「ボトムアップ」かの決定をさせる点にある。2016  
年シーズンを迎える新チームは「自分たちにはできないの  
で、今年をお願いします。」とトップダウンを選択したと  
高山監督は語る。このことから、どちらかを選択する際に  
部員たちのなかで話し合いが行われて、チーム状況などの

要因を踏まえてトップダウンを選択したことがうかがえる。部員にとって非常に難しい選択ではあるであろう。しかし、どちらの方が自分たちにはあっているのかといった議論は部員たちの中でなされていて、それによって今一度、自分たちのチームを見直し考えるきっかけとなっているように思える。部員全員で出した結論であれば、部員は満足して部活動に取り組めるであろう。この選択権を部員に与えるということは、ボトムアップの新しい手法ともいえる。

### 3-4 ボトムアップの共通点

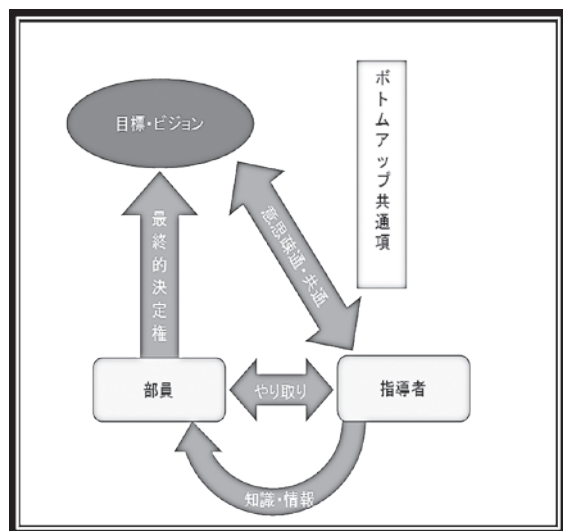


図4：＜ボトムアップの共通項＞

共通して行われていることは、以下の3点である。

- ①部員に最終的な決定権を委ねることである。指導者が最初にチームの方向づけを行うため、トップダウンを一時的に組み入れることはあるが、シーズン中旬～終盤になると部員が最終的な決定権をボトムアップ式に移行している。
- ②部員と指導者の間での情報交換である。部員、指導者間のやり取りがしっかりと行われているため、指導者が部員の目標やビジョンをよく理解することが可能となっていると考えられた。
- ③指導者からの専門的な知識や情報を部員に提供するし最新のサッカーのシステム論や、部員からの要求、質問に対する受け答えなど積極的に提供されていた。

### 3-5 ボトムアップの独自性

堀越高校は一人のリーダーが最終的な決定を担っており、リーダーが突出して成長する。このことからリーダーを中心とするボトムアップと見ることができる。であるとした。綾羽高校は「全員リーダー制」といって部員一人一人に役割を与えている。松商学園はリーダーが週替わりで

ある。さらに、堀越は基本的に部員に任せるスタンスで、関わる時も、「どうする?」「なにがしたいの?」などの問いかけがメインとなっている。つまり、間接的なサポートが中心である。対して綾羽と松商学園は、考えさせる要素を入れていくために問いかけを行うが、チームを方向付けるためには一時的にトップダウンを併用している。このことから間接+直接的なサポートであるといえるであろう。

このように、同じボトムアップでも展開の仕方は各高校、指導者それぞれ多種多様であることが明らかとなった。

### 3-6 ボトムアップの成果

また、以下の発言から「自ら考え行動できるようになる」といった成果が挙げられることも読み取れた。

H-S氏「生徒の取り組み姿勢、聞く姿勢が良くなっていてます。サッカー以外の部分も良くなっている印象はかなり受けます。」(項目4 導入前と後の変化)

A-K氏「こうやって一つ役割を渡すだけでもつぎつぎと考えて行動し始めるのはボトムアップの特徴の一つなんじゃないかなあ。」(項目2 具体的な取り組み)

M-T氏「ボトムアップでメンバー選考しているときのほうが、自分で何がいけないのかなとか考えたり、選手間で聞いたりだとかは指導者のときよりできてきます。トップダウンの時より確実に自主練をしていました。」(項目2 具体的な取り組み)

また、指導者は部員たちの要求に応えるという役割は担うため、ボトムアップを採用するうえで、指導者は日々学ばなければならない。

## 4 まとめ

本研究では、近年、サッカー界において脚光を浴び、部員主体の運動部活動の具体例ともいえる「ボトムアップ理論」を採用し成果を出している三つの高校のボトムアップを比較、検討詳細した。今回のヒアリング調査の結果から、三校のボトムアップにはそれぞれの捉え方があり、そのチーム状況にあった手法を用い、独自の実践を行っていることが明らかとなった。しかし、ボトムアップの共通点として、①「部員に決定権がある。」②「部員と指導者で意思疎通ができていてる」③「指導者からの専門的な知識や情報を部員に提供する」があることが分かった。つまり、この三つの要点は部員主体の部活動運営に欠かすことはできない部員も指導者も成長していけるボトムアップは、強



豪校の部活動でも、楽しさを優先している部活動でも、どんな形態の部活動でも、部員主体の部活動運営をするうえで有効な手法の一つといえるだろう。

## 5 今後の課題

今回の研究では、ボトムアップ理論を指導者の目線から分析し、その結果からボトムアップ理論が部活動運営を行うための有効な手法ということが明らかとなった。しか

し、実際にボトムアップ理論で部活動を行っている部員には接触していないため、現場の声や情報は乏しいといえる。指導者のボトムアップに関する概要だけでなく、部員の満足度調査や主将へのヒアリングを行い、部員がボトムアップに対してどのような思いを抱えているのかを認知することで、別の角度からボトムアップの詳細を分析していくことが、今後の課題として挙げられた。

## 参考文献

- (1) 石原 (2012)「運動部活動がもたらす効用の要因分析—愛媛県の高等学校を対象として—」
- (2) 内海和雄 (1998)「部活動改革—生徒主体への道—」不昧堂出版p202
- (3) 小倉広 (2008)「あたりまえだけどなかなかつけないチームのルール」明日香出版社p31
- (4) 加部究 (2013)「それでも『美談』になる高校サッカーの非常識」カンゼン p227
- (5) 小林恵智 (2006)「【入門】チーム・ビルディング—1+1が2以上になる最強組織の作り方」PHPビジネス新書p19, 21
- (6) 佐藤等 (2011)「実際するドラッガー (チーム編)」ダイヤモンド社P41, 55
- (7) 杉山重利 (1998)「どう変わる 21世紀の学校体育・健康教育 (体育科教育別冊)」p63, 64 大修館書店
- (9) 日本体育協会 (2014)「学校運動部活動指導者の実態に関する調査報告書」
- (10) 畑喜美夫 (2013)「子どもが自ら考えて行動する力を引き出す魔法のサッカーコーチング～ボトムアップ理論で自立心を養う～」p20, 33 カンゼン
- (11) 畑喜美夫 (2014)「ボトムアップ式指導でチーム力を伸ばす魔法のサッカーコーチング」p21, 22, 23 カンゼン
- (12) 文部科学省 文部科学白書 (2006)「運動部活動への支援 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpab200601/002/008/018.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200601/002/008/018.htm)
- (13) 文部科学省 (2010)「学校・家庭・地域が力をあわせ、社会全体で、子どもたちの「生きる力」をはぐくむために～新学習指導要領 スタート～」
- (14) 文部科学省「中学校学習指導要領第一章総則4の2」[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/newcs/youryou/chu/sou.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/youryou/chu/sou.htm)
- (15) 文部科学省「運動部活動の在り方に関する調査研究報告 (中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議)」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/sports/001/toushin/971201.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/001/toushin/971201.htm)
- (16) 山近義幸 (2014)「まるごと畑喜美夫【徹底解析】なぜ、ボトムアップ指導は強くなるのか?」ザメディアジョン p32～41

